中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第 4 巻 第 2 号（2005）29 ― 35 頁

再考“見えないアルバム”の生成
―私の発達研究―

中京大学心理学部　古澤　頼雄[注1]

Invisible album reconsidered: Its becoming and developmental research

KOSAWA, Yorio（School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-Honmachi, Showa-ku, Nagoya 466-8666）

私は信じない
f8・60 分の 1 秒の
機械の正確さを
その瞬間はもはや今ではないから

私は信じない
きれいな表紙の育児日記の
丹念な文字の跡を
そこではきみは生きてられない

私は惜しみなく
時を過ぎ去るにまかせ
きみを生きるにまかせる

共に笑い共に争い共に生きる
きみを私の心と体に刻みつける
それがきみを記録するただ一つの方法だ

この詩は，谷川俊太郎さんの「見えないアルバム」である。そして，筆者はその意味していることに深く共感し，この題名を使うことを許していただき，これから述べる子ども達が二十歳を迎えるのを機に，多くのスタッフとともに小冊子を刊行した（古澤ほか，1968）。現在，その続編を計画中であるが，それは彼らが 40 歳に達している姿をスタッフの成長とともに纏めようとするものである。

「見えないアルバム」生成の萌芽

まず，引き金になったのは，大学院を終えて従事した学生相談の仕事である。進路相談・人生相談。経済上の相談，精神的不安定を訴えるものなど来談内容は様々であったが，そこに共通していることは，自分のあるべき姿が不明確である，自分の将来展望がどうしても明確にならないなど広い意味で自己同一性に関わるものが多く見られたことであった。当時，新入生全員を対象に大学が行った精神健康度調査の結果から「○大生一割精神障害説」なども新聞紙上に報じられたことがあったが，そのことは別としても大学生活後半になってなおかつ自分に時間的展望が抱けないのはなぜだろうか。当時筆者が抱いた大きな疑問であった（自分を振返った時このことと無縁でないことも確かであったが……）。

このような仕事上の日常的経験を通して筆者を引きつけたのは，Erikson, E. の "Childhood and Society"（1963），"Identity: Youth and Crisis"（1968）などであった。これらは後にいずれも訳本が出版されたが，人生を生涯的に理解しようとする著者の基本的姿勢，さらには，人間が送る様々な時期がそれ以前の経験の中で積み重ねられるという視点は筆者にとって新鮮な刺激であった。そして，これらの認識が人間の理解をより長い目で営みたいという筆者の問題意識に繋がっていった[*1)]。

このような観点に立った時，国外においては様々な長期にわたる縦断研究がなされているにも関わらず，国内において当時名古屋大学の丸井文男教授を中心とした中学生の追跡研究，北海道大学の三宅和夫教授を中心とした乳幼児の追跡研究などを除いて，極度に少ないことにも問題を感じ，当時週一日出入りしていた日本総合愛育研究所（当時は愛育病院付属愛育研究所）で所員をされていた野田幸江氏に相談をもちかけて，愛育病院産婦人科で子どもが誕生する以前からの縦断研究を共同研究としてスタートさせることとなった。その第一歩は第一子を出産す

注 1　kosawa@lets.chukyo-u.ac.jp

る予定で来院している母親達に呼びかけて，筆者らの意図を伝え，協力を承諾して下さった方と出産前3ヵ月の時点で院内の一室で現在の心的状態や生まれてくる子どもへの期待，どのような子育てを考えているか，それは自分が受けてきた子育てとどの様に異なるかについて約20分の面接を行い，個々の協力者の出産経過については産婦人科医よりの情報によったものの，生後二ヵ月毎の病院の保健指導の際には，指導終了後に時間を得て，子どもの成長を中心に子育ての様子を記録することを続けた。そして，子ども達が3歳になってからは，当時の勤務先であった日本女子大学家政学部児童学科に新設された遊戯室に母子ともに隔週土曜日に来室してもらい，約1時間半の子ども達の遊び（子どもグループ）を一方視窓越しに院生が観察記録すると同時に別室で母親達の話し合い（母親グループ）やモニターテレビを通して子ども達が遊ぶ様子を見てもらったり，講師が母親向けに講演する機会を作るなどした。なお，協力してくれた人数は，出産前面接で約100名からスタートしたが。愛育病院外で出産したり，その後の転居による移転先不明，協力中断などでグループを形成した時点で約30組母子であった。

協力者と筆者との最初の出会いからの経過をその一人（K. I. さん）は次のように語っている。

「1965年一人目の子どもをもった私は，一人目にしては高齢であることから慎重に産院を選び，家からも近い愛育病院に4月某日出かけた。そして，その時，一枚のカルテが作成されたのである。これは私の計画的行動で，かなりの必然性をもった人生の一部である。一方，日本女子大の教授であり，愛育研究所にも籍を置かれる古澤先生は，ある考えのもとに先生の研究テーマを設定され，その場を愛育病院に置いて，一定の条件のもとに数十枚のカルテを抜きとられた。これは古澤先生の計画的行動であり，必然性をもった先生の人生の一部であるといっていいのだと思う。たまたまその数十枚のカルテの中に，私のカルテが選ばれた。そこが偶然といえる部分かもしれない。このような必然性をもった2本の線がある時交差をする。それが出逢いというものではなかろうか。この出逢いを大切に思うか，見過ごしていくかは，その場に出逢った人にまかされているわけだが，私の場合は，それ以来ずっと貴重なかかわり合いを保ってきたことである。

あの建て直す前の古い愛育病院の玄関を入って左手の方にあった部屋で初めて古澤先生にお目にかかった。その言葉をえらぶような慎重なお話し振りは，少し得体のしれない感じを与えられもしたが，また，一方，育ちの良い学者といった印象を持ったのを覚えている。そして，私自身育児に関して間違いのないように，きちんとしつけて育てたいと思う所があったので，折々の提案に熱心に参加し，協力してきたのである。だから，私と H. R. L. [*2]とのかかわりは，私の積極的な意思による部分が多い。その20年に及び年月の中で，私は様々ななことを考える手がかりをなるものをこの H. R. L. の話し合いの中からいただいてきたと思っている。（以下省略）」（古澤ほか，1984）

このような経過は，母親達が子どもを育てていく過程で遭遇するいろいろな問題をもちかける身近な相談者という役割を筆者に求めるようになっていったことを物語っている。と同時に，筆者も定期的に接する親子に対して“研究の客観性重視”という奇麗事では済まされないことをひしひしと感ずるようになっていった。

三宅は，その近著（2004）において次のように述べている。

「縦断研究がいかに実施困難であり，多大の時間と労力と費用と忍耐力が必要するものであることについては，米国でよく聞いてきたはずであるが，実際始めてみると，すべてをなげうってというといささか大げさであるが，想像以上にたいへんなことであり，労多くして実りの少ない仕事だとつくづく思ったのである。古澤も述べているが，研究者と対象者との間の信頼関係を築くということがまずもって大事であるが，それが容易なことではない。」（68頁より引用）

当時，筆者が意識していたことがこの表現にはすべて尽くされているように判断できるが，筆者にとっては自分の意識の変化がまさしく研究者・対象者関係への着目であったことは確かである（古澤，1995 a）。

端的に示したのが，母親達宛に渡していた不定期発行の小新聞「創生」に掲載した次の文章である。

「……それは，「私」という一研究者が関わる子ども達に対して，自分は「研究」という枠以上の責任をもっているという考えです。つまり，人間的触れ合いの中でより良く子ども達が展開するように，微力ながら自分自身を役立てていく中に，発達研究の意味があるように考えてきました。

このような方向と姿勢をひきつづき，より明確化

することが当面の自分の問題であると同時に，より質的な向上をめざすために，共同の場としてのこの活動に参加する私達の在り方が常に検討されなければならないと言えます……」（第5号 1971年7月）

また，同じ年に催された日本心理学会第40回大会シンポジウム「パーソナリティ形成に関する諸問題」において研究者・対象者関係について言及した話題提供を行った。

「……一体研究に協力し，その対象者になることによって対象者自身が得るものは何かということである。こう考えていくこと自体，既に研究者自身が客観的立場という枠を外れかけていることにつながるであろう。しかし，われわれが取り扱う対象者がすでに極端にいえば，一回しかない人生を送っている個である以上，単に資料を対象者から得て分析するということで終わらせてはならないとするのは単に演者の思いあがりであろうか。

個としての研究者が，個としての対象者に触れること自体，既に人間関係を無視してかかかることのできない問題であるとみるならば，むしろ，関係自体を吟味しつつ両者に心的展開をもたらす方向をとることに縦断的研究の意義を求めることができるのではないであろうか。……」

「見えないアルバム」生成の具現化

子ども達が3歳になった時（1969年）から，筆者は，「おとなの心の成長なくして，子どもの心の成長はない」という命題を通してひとつの実践を一二年後から実行するための準備を始めた。それは子ども達が家庭を離れて，筆者らスタッフとほぼ一週間の共同生活（H. R. L.）を送ろうというものであった。その準備の一つとして，そこに参加するおとな達が共通の理解を築く機会を作るために「児童発達研究会」を設けて，まず，Bettelheim, B, "Love is not enough（1950）" を筆者の試みに共感してくれた同輩，院生などを交えて読むことであった。この本はベッテルハイムがシカゴ大学付属施設である情緒障害児療育寄宿学校（The University of Chicago Sonia Shankman Orthogenic School）における子ども達の生活を論じたものであるが，この本の特徴は，朝起きてから寝るまでに章を分けて，それぞれの場面で表す子どもの行動の意味の理解を子どもの立場に徹して論じているところにあった。ここで，筆者達が学び取ったのは主に次の2点であった。

その一つは，子どもが自分で行動を起こすには時間が必要であるということである。これは当たり前のことではあるが，われわれはつい子どもに時間を認めるよりは，むしろ時間を奪ってしまうことになりがちである。例えば，朝の目覚めを考えても日常生活のなかでは，“子どもが目覚める”のではなくて，“おとなが目覚めさせる”，「ほら……する時間ですよ」といってしまって，子ども自身が変化していくステップを踏むことなしに子どもの心の扉を強引に開けてしまうという問題がある。この類のことが生活のなかでとても大事にされていることを筆者はベッテルハイムの本を読んで感じた。

もう一つは，生活空間の問題である。われわれの生活空間は，それぞれの機能が決まっていることが殆どである。しかし，子どもにとってはむしろどうとも使える場が自分を一番表現できる場であるというのがベッテルハイムの指摘である。彼はそれを“中間的な場”と表現している。特定の目的もなく設けられているコーナーやどうにでも使える広場などで子ども達がそれこそ遊びまくっているのを筆者も経験したことがあるが，それは彼らが自分を思いきり発揮できる場であると言える。

このようなベッテルハイムの考えは後に子ども達との共同生活（H. R. L.）の場を準備するために多いに役立ったが，筆者はこのことも含めて実体験するために米国シアトル市の沖合にあるオカイラ島での自由キャンプに2週間参加する機会をもった。そこでの主な目的は，スタッフが子ども達にどのように接するかを直に知ることであった。ここでのキャンプは状況としては子どもが様々なことに参加できるようになっているもののそのどれを選ぶかは子どもの自由にまかされていた。特に，子どもがその判断に迷っている時に子どもが決断するまでおとなが待っている姿は筆者にとって印象的であった。

さて，このような準備を経て，いよいよ場所の選定に入った。最初いろいろな候補を検討していくうちに幸いなことに，群馬県多野郡中里村で小学校の分校が廃校になるという情報をその村出身のスタッフから得た。さらに，校舎の一階部分は保育園として使用することをすでに決めているが，二階についてはその使用を検討中であるとのことであった。早速，筆者らはそのスタッフの両親の仲介によって，村長と会い，こちらの考えを直接伝える機会をもつことが出来た。その後，二階部分の三教室の仕切り

を取り払い，そこに90帖の畳を敷いて一部屋にすること，増設部分に台所，風呂場，便所をつけて，普段は村の高齢者の集会所として使用し，夏期の一定期間をわれわれに提供してくれることが決まり，直ちに改造工事に着手してくれた。名称は“長寿園”であった。

こうして共同生活（H. R. L.）の場を得た段階で行ったもうひとつの準備は子ども達とスタッフ相互の関係を密接にするために日帰りの子どもグループ“デイグループ”をほぼ三ヵ月に一度行うこととその時の子どもとの体験をもとに“スタッフ合宿”を行うことであった。特に後者は通例二泊三日にわたってそれぞれのスタッフが自分の考えや感情を開陳し，自分の行動の明確化を図る機会となった。このようなスタッフ合宿はその後月例会として現在でも小規模ながら継続している。

中里村での最初の共同生活（H. R. L.）は子ども達が小学校1年生の夏（1972年）に行われた。一日の過ごし方は，一言でいえば，“ノンプログラム”であった。毎日を“冒険の日”と称したものの子ども自身の判断によって一日の過ごし方は決まっていった（古澤，1995b）。

決めないことの中には食事の時間も含まれていた。というのは，子ども達が小さい時はスタッフが3人か4人チームになって3食ずつ炊事し，配膳ができると皆に声をかけたのであるが，中には丁度その時に何かに熱中している子どももいた。勿論，そのような子どもにも声をかけるのであったが，やはりその子どもとしてはそちらをやりたい，そういう時には，その子どもは後で食べられるように配慮した。食生活というのはそれぞれの心のかなり根幹に関わることと考えていたので，なくなっては困るという気持ちを子どもにもたせないように，そのことについてきちんと伝え，子どもは皆が食べ終わってしまってからでも自分でゆっくり食べることが出来るようにした。けれども，何年も共同生活（H. R. L.）をしていくと，皆が集まってがやがや喋りながら食事するのがこの上なく楽しいことなので，何かに熱中していた子どももその時間になると皆と一緒に食事をする方を選んだというのが実際のところであった。

もう一つは，起床・就寝である。朝早く起きるのは大体かぶと虫を捕りにいくためであったが，そういう子ども達は朝の5時ごろスタッフをたたき起こして一緒に出かけた。一方では，前の晩が遅かったので，寝ていたいという子どももいるという具合であった。夜目がとろんとなってきた子どもが現れると皆で布団を敷くのであるが，○時には就寝とは決めなかった。小学校低学年の頃は「今日は徹夜する」と頑張っていた子どももいたが，そのような子どもも12時から1時になるとダウンしていた。

就寝時刻を決めなかったことはスタッフに別の問題をもたらした。というのは，スタッフ達は子ども達が全員寝静まってから毎晩ミーティングをしたのであるが，夜中の12時頃から始めて，午前2時頃に終わるという具合であった。このスタッフミーティングでは，その日の子ども一人一人の姿をそれぞれのスタッフがどのように捉えたか，どういうことを考える必要があったか，翌日にはどういう準備すればよいかなどをほぼ2時間費やして話し合った。そうしているうちに早起きの子どもは5時頃には起きてくるのでスタッフは期間中3～4時間の睡眠で過ごしていた。

一方，昼間はどのように過ごしたかというと，中里村で出来ること（川遊び，山登り，工作，校庭での遊び，蒟蒻作りなど）をマスごとに書いてあるホワイトボードに，子ども達が朝，自分の名札を午前，午後に分けてマグネットで止めるようにした。そのことによって，例えば，今日午前中は川に泳ぎにいきたい子どもが何人かを掌握できたので，その時点でスタッフの人数と配置を決めて，そこからその日の動きが始まった。中学2年生頃から，夜に階段を教室にして人間の心や人間関係についての話題をスタッフが提供した後，小グループに別れて話合った。これは，“長寿学園自主講座”と名付けて，以後毎年行った。

これが全体的な経過である。そして，流れとしては，最初はおとなと一対一で触れることが多かった子ども達が，中学生になると，自分達だけで話す時にはスタッフに「入ってこないで」と言うこともあった。そして，高校生や大学生になり，共同生活（H. R. L.）の場だけに留まらず，お互いに連絡を取りあって語り合う機会が増えていった。また，小学5年生の時から横浜市の小児療育センターに通う自閉的な発達障害をもつ子ども達6名が参加したことも種々の経験を全員にもたらした。

子ども達が中里村での体験をどのように受取ったか，そのことは「見えないアルバム」（1986）に一人一人の語りとして掲載されているのでここでは省略する。

「見えないアルバム」生成の理論的背景

さて，1972 年から 1985 年にわたる毎夏の共同生活（H. R. L.）を通して，子ども達の心の成長にとって必要なおとなの関わりに焦点をあてた発達研究をどのように理論化できたであろうか。

その一つは，子どもの発達は彼らを取りまくおとな達の発達とともにあるという考えを実践したことである。このことはごく当り前のように聞こえるかもしれないが，われわれはともすると子どもの動きのみに焦点をあてておとなとの関係の中に現実が動いていることを見過ごしてしまう。さらに，おとなと子どもとの接触は瞬間にある。この瞬間における心のやりとりがお互いの心の内容に変化を生んでいく。このような考えは，ともすると性格形成などという表現でかなり長い時間的スパンで人間の発達を見がちなことに対するアンティテーゼである。そして，その意味するところは，かかわるおとなはその一挙一動を子どもに与える影響として考えていく必要があること，そして，同時におとなも子どもからの影響によって刻々と変化していくことを明確にすることである。最近では，子育てをこのような視点で考えていく試みも出始めている。また，社会構成主義として主張されている論旨もこのことに繋がるのではないか（Gergen, 1999）。

さらに，ベッテルハイムが「愛はすべてではない」と表現していることは，愛情さえあれば子どもは育つという考えを否定し，愛情も必要であるがそれ以上におとなの理性ある子どもとの触れ合いこそが共に育つ基盤であるという主張に繋がる。

二つ目は，人間の発達を行動という客観的変化よりも，発達者自身が意識として捉えた変化によって考えていこうとしたことである。それは協力者が筆者らのかかわりを通して心に残る体験こそがその意味を端的に表している。このことを筆者は“当人をして語りしめる”と表現している。子ども達が 20 歳になった時点で参加者皆が自由に記述した共同生活（H. R. L.）の体験を「見えないアルバム」としてまとめたのはその端的なあらわれである。

三つ目は，発達研究は協力する人たちへ研究者からの支援までも含めて定義づけるべきである。筆者らが行ってきた子ども達との共同生活（H. R. L.）はアクションリサーチの一種とも言えるが，実はそれ以上にそこでの生活が子ども達のその後に影響を及ぼしていたことに気づく。

数年前（2000 年）に受取った想い出の記録では次のような語りが見られる。

「今思い出すと，その時の情景だけでなくて，ニオイまでもがよみがえって来ます。それは，自分のすべての感覚を全開にしていた，実に創造的な時間と空間だったと思っています。」（K. H.）

「常識とかモラルといった事がベースになっているのではなく，これは OK かな？とか，これはダメかな？とかいった曖昧な形で出来上がったルールであり，変化に富み，とても柔軟なものであるように思えます。」（H. A.）

「人間同士から学ぶことが多くなり，自分の家族関係やその他から逃れ，本当の自分を取り戻せるかけがえのない空間になったのです。その頃を思い返してみると，学校や家族からは鉛のようなプレシャーを科せられていたように思えます。」（K. T.）

「現在，フルートを教えているのですが，ひとりひとりの違いを見つけて，そのひとにあった教え方を知らず知らずのうちに工夫しようとしている自分に気づくことがしばしばです。このものの考え方も中里村での生活が育んだものだと思います。」（Y. M.）

筆者の最近の発達研究から

「見えないアルバム」は前述したように形を変えて今も続けられている。多分，それは筆者が生きている限り終わらないことであろう。

その一方で，筆者がここ 10 年ばかり取り組んでいるのは非血縁家族に焦点をあてた発達研究である。ここでも中軸にしていくことは研究者-協力者関係の重視にあることは勿論であるが，具体的に言うならば，血のつながりのない家族において，育ての両親が幼年養子として迎えた子どもに生みの親の存在をどのような時期に，どのようにして伝えるか，そのことが子どもの自己形成にどのような意味をもつか，今後の非血縁家族にとっての指針を産出しようとする課題である。

この課題への着目は，1996 年頃から筆者が家族関係における親子相互世代性の発達モデルを考えつつあったことと一致する。その一つに“存在還元モデル”（古澤，1998）と名づけたものがある。これは，子どもに起こる「生みの親なくして自己存在はない」という意識をもとに親子関係を考えたものである。確かに人間は誕生という生物学的事象を経な

いでこの世の中に存在することは出来ない。一方，個人の自己形成はむしろ心理学的な経験の積み重ねによって成り立ってくる。けれどもその過程はあくまでも自己のルーツ（出自とも言う）に関する確認によって支えられていると見ることができるというのが筆者の主張である。“自分はどこから生まれてきたのか”“自分は誰の子なのか”などというおとなに向けられる子どもの問いはこのことを物語っている。そして，このような現象が青年期に至って見られる“根こぎ感（uprootedness）”に繋がるものと判断できる。根こぎ感とは自己存在の拠り所を根底から喪失すること，すなわち，地面に根を下ろしている感覚をもてない浮き草のような自己におこる不安定感に当てはめたErikson, E.（1964）の用語であるが，筆者はあえてこのことを自己の生物学的発生の不明確さに端を発していると理解してみたのである。

丁度，このようなことを考えていた時に筆者は偶然にも“ニュースの森”というテレビ番組が幼年養子縁組において育ての親が養子とどのようにして親子になっていくかを取上げているのを視聴した。実際には見たのは番組の最後の部分だけであったが，そこで語られている“親子になる”という表現に筆者は大きく心を打たれた。と同時に自分がこれまで考えていた“親子”が血縁を前提としたものに限っていたことに改めて気づかされた。

そこで筆者がとった行動は，ひとつは当該テレビ放送の番組ディレクターにコンタクトを取ることであり，もうひとつは幼年養子縁組に関する心理学領域の文献を読むことであった。幸いにも両者とも順調に進み，前者については幼年養子縁組の仲介をしているNPO“環の会”の代表者と直接会って活動内容について具体的に聞くことができ，後者については，国内外の図書・雑誌論文に目を通し，特に養子達が青年期に起こす「生みの親探し（searching）が彼らの自己形成と深く関連していること（Brozinsky and Shechter, 1990），養子にひたすらその過去を隠す“confidential adoption”が子どもの成長につれて「自分のルーツを知りたい」という要求への対処を不適切にして，周囲に対する不信感や心の動揺のために子どもが様々なacting outを起こしがちになることへの反省から，より信頼感をもち合える親子関係形成を目指して，生みの親の存在を子どもに知らせる“open adoption”がすでに欧米では広く行われており（Grotevant, McRoy, Elde and Fravel, 1994, Brodzinsky, Lang, and Smith, 1995, Grotevant and McRoy. 1998），国内では前述のNPOがそのことを試みつつあることを知った。

ところで，“open adoption”において，子どもに出自を伝えることは“telling”と呼ばれているが，それは真実を子どもに伝えることと言えるが，いわゆる「真実告知」と言い切っては，その全貌を示すことにはならない。むしろ，storytelling（お話聞かせ，語り聞かせ）で使われているテリングがかなり現状に近いと判断される（古澤ほか，1993）。

現在，筆者は4名の共同研究者とともに全国に散在している該当家庭を訪問して，子どもが幼い時からどのようにテリングを実行しているかを中心として，親のもつ子ども観・子育て観などについて両親への面接調査を行うとともに，子どもの抱いている親像・親理解，自己像などを提示する図版へ子どもが示す反応を通して対話法で把握する試みを進めている（古澤ほか，2004，古澤，2005）。もちろん，その最終的な目標は青年期に向けて子どもが生みの親，育ての親，そして自分という三者関係を理解し，自分の出自を理解することが子ども達の自己形成にどのように影響していくかを縦断的に明らかにしようとすることで，現在子どもが3歳までの継時的資料をほぼ収集し終わりつつある。

まとめ

筆者が研究者・協力者関係に重きを置いて継続している縦断研究について，その生成と理論的背景を再考した。ここで，強調してきたのは，(1) 子ども達の発達は彼らを取りまくおとな達の発達とともにあるとした，(2) 発達者自身が意識として捉える変化によって発達を理解しようとした，(3) 発達研究は協力する人たちへの研究者からの支援までも含めて定義づけるべきであるとしたことであった。最後に非血縁家族におけるテリングに関する筆者の最近の発達研究に言及した。

付記：実は，ここに述べた「見えないアルバム」に加えて，「もうひとつの見えないアルバム」がある。それは，1975年から1978年にかけて日本赤十字医療センターで出産した母親と第一子の協力を得て行われている縦断研究である。

引用文献

Bettelheim, B. 1050 Love is not enough The Free Press（村瀬・村瀬訳　1968 愛はすべてではない　誠信書房）

Brodzinsky, D. and Shechter, M. 1990 The Psychology of Adoption. Oxford University Press.

Brodzinsky, D., Lang, R. and Smith, D. 1995 Parenting adopted children. In M. Bornstein (Eds.) Handbook of Parenting, Vol. 3. Lawrence Erlbaum Associates, 209-232.

Erikson, E. 1964 Insight and Responsibility Faber and Faber（鑪　幹八郎訳　1971 責任と洞察　誠信書房）

Gergen, K. 1999 An Invitation to Social Construction. Sage Publications.（東村知子訳　2004 あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版）

Grotevant, H., McRoy, R., Elde, C. & Fravel, D. 1994 Adoptive family system dynamics: Variations by level of openness in the adoption. *Family Process*, 33, 125-146.

Grotevant, H. and McRoy, R. 1998 Openness in Adoption Sage Publications.

古澤頼雄・野田幸江・高橋種昭・藤崎眞知代・福富 護・太田茂行・福本 俊・佐藤加津子・石井富美子 1984 18 年にわたる親子関係の軌跡－その総括的検討－ 安田生命社会事業団研究助成論文集　第 20 号，49-54.

古澤頼雄編　1986　見えないアルバム　彩古書房

古澤頼雄　1995a　長い時間軸からみた縦断研究の方法を求めて　南　博文・やまだようこ編　講座 生涯発達心理学 5　老いることの意味　中年・老年期　金子書房　189-208

古澤頼雄　1995b　児童心理学からみた子ども達－私の子ども観の源泉「見えないアルバム」 小児心身医学雑誌，4，11-16.

古澤頼雄　1998　親子関係における親子相互世代性 発達，73，1-11.

古澤頼雄・富田庸子・石井富美子・塚田-城みちる・横田和子　2003　非血縁家族における若年養子へのテリング －育て親はどのように試みているか？－　中京大学心理学研究科・心理学部紀要，3（1），1-6.

古澤頼雄・富田庸子・石井冨美子・塚田－城みちる 2004　非血縁家族における子どもへの真実告知 －実親サーチに関する発達心理学的検討－　平成 12〜14 年度学術振興会科学研究補助金（基盤研究（C）（1））研究成果報告書

古澤頼雄　2005 非血縁家族を構築する人たちについての文化心理学的考察 －その人たちへの社会的スティグマをめぐって－　東京女子大学比較文化研究所紀要，66，13-25.

三宅和夫・陳 省仁・氏家達夫　2004「個の理解」をめざす発達研究　有斐閣

注　記

＊1）当時このような視点で作成した横断的研究に次の論文がある。

古澤頼雄 1968 青年期における自我同一性と親子関係　依田新編　現代青年の人格形成　金子書房 67-85

＊2）最初はスタッフと子ども達との共同生活を H. R. L.（Human Relationships Laboratory の略）と称したが、後には活動全体を H. R. L. と呼ぶようになっている。